現地視察会 体験感想文

今回この現地視察会に参加したのは、国際協力の現場を自分自身の目で見てみたかったからです。高校生のころから、国際協力に興味がありましたが、社会人になってからは、そのような世界に思いをはせることも、ほとんどなくなっていました。しかし近年、やっぱり何か国際協力に携わることをしたい、という気持ちが大きくなってきて、まずは会社の夏季休暇を利用して、この視察会に参加することに決めました。

現地では、NPO 法人ハロハロ様の雑貨作りプロジェクトや、現地共同団体とともに取り組んでいる事業について、話を聞いたり、自分で雑貨のデザイン画を描いて、作るところを実際に見たりすることができました。日本ではほとんど見かけない足踏みミシンを使いこなしているところを見て、感心しました。しかし、セブには全ての工程をできる人はまだ数人しかいないことを聞き、トレーニングにもある程度の時間がかかったり、苦労があることが伺えました。今後、雑貨作りの技術を持った人が増えていったり、雑貨の品質が向上していったり、どのように発展していくのかとても楽しみです。

また、今回初めてホームステイを体験させて頂きました。ケイラゼルちゃんという 13 歳の女の子と、彼女の友達のカミルちゃんが、いつも一緒にいてくれて、フィリピンの生活について教えてくれたり、いろいろな話をしました。ホストマザーやホストシスター達も、とても親切に接して下さいました。食卓は屋外だったので、手で払っていないとハエがたかってきたり、シャワーはなく、水を桶で浴びたり、お手洗いも桶の水で流したりと、日本での生活と比べたら、衛生的に心配になる点や不便な点はたくさんありましたが、全く苦痛に感じなかったのは、ホストファミリーとの生活が楽しかったおかげかもしれない、と思います。

滞在した地域の人々は、自分が貧困層であることを自覚していて、それでも明るくポジティブに生きている様子を見ると、彼らの生活に「～が足りない」と思うのはこちら（先進国の人間）の見方であって、本当に援助が必要なのだろうか、と思ってしまうほどでした。しかし、学校でコンピューターの授業が行われているにも関わらず、学校にコンピューターが 3 台しかない現状や、スカラシップで勉強する機会を得た学生が、かなりの努力をして良い成績を修めていること、高卒で就くことができる職業は、かなり限られてしまうことを聞くと、彼らにもっと将来の選択肢が広がって、様々な点で生活が向上していくことを願わずにはいられません。

また、ダンプサイトを訪問する機会もあり、スカベンジャー（ゴミの中から、カンやペットボトルなど、お金に替えられるものを集めて生活する人）の方の話を伺ったことなども、印象に残りました。ゴミが分別されたり、複数の場所に分散されるなど、国の環境面では改善と思われることも、スカベンジャーの方には、収入源の減少につながっていることを知り、複雑な気持ちになりました。

現状を見てきて、自分が彼らのためにできることは何なのか、すぐには答えが出ません。しかし、ずっとそれを考え続けていきたい、と改めて思いました。

最後に、この素敵な体験を提供して下さった、成瀬悠さんをはじめとする、NPO 法人ハロハロ関係者の皆様にお礼を申し上げます。